

久喜市・ローズバーグ協会だより



発行 久喜市・ローズバーグ協会だより
発行日 2025年 5月 1日



雨の上高地 河童橋の前で ハイ・チーズ



中学生交流 市議会の議場も見学 興味津々でした

ご挨拶

久喜市・ローズバーグ協会

会長 平澤 香

久喜市そしてローズバーグ市の皆さん、こんにちは。

2024(令和6)年は7月22日から8月1日の11日間、市内中学生等14人がローズバーグ市を訪問しました。また、10月3日から10月11日の9日間、ローズバーグ市から19名の友好親善訪問団が市内の各家庭にホームステイするとともに、市内見学や長野・岐阜方面への県外旅行などを通して交流を深めました。

2025(令和7)年は、久喜市とローズバーグ市が姉妹都市を結んで10周年に当たる記念の年です。「友情と理解」のスローガンのもと、更に交流を深めたいと思いますので、市民の皆様には、久喜市のホームページや本紙をご覧ください、本協会の趣旨にご賛同いただくとともに、活動に参加してくださいようお願い申し上げます。

第23回ローズバーク親善訪問団受け入れ

2024年10月3日～10月11日

2019年に訪問団の皆様をお迎えして以来、5年ぶりに訪問団の皆様をお迎えすることが出来ました。今回は、ローズバーク協会会長のジャネット・ジョンストンさんを団長に、19名の皆様の訪問となりました。20代の3名をはじめ比較的若い年代の方もお出でになりました。わくわく・ドキドキの日々の一コマを日程に従ってご紹介します。

訪問初日・2日目



出迎えのホストファミリー
とご対面。今宵からホーム
ステイが始まります。



消防署や市役所、給食センターを見学。久喜小学校で児童たちとグループとなり、英語でのコミュニケーションを楽しみました。



市内見学の後 清久コミュニティーセンターでの歓迎会



市長さんはじめ来賓の方々の参加もいただき、訪問団の方々を囲んで歓迎会を賑やかに開催。2日目ですが、ホストファミリーとゲストの方はすっかり打ち解けていました。訪問の記念品の贈答もありました。

訪問3日目・4日目 ホストファミリーと

それぞれのホストが心を込めたそれぞれのおもてなしをしてくれました。お2人の方の活動を載せていただきました。

初めての来日のオートムさんを迎えて

篠田和枝

ゲストは Autumn Mann (25歳) でした。彼女の父親が立川市に住んでいたことがあり、幼い頃から日本語や日本の文化に興味を持っていました。特にアニメや着物が大好きです。来日の目的は、アニメ関連の施設に行くこと、着物を着て日本の伝統的な街並みを歩くこと、そして日本語に触れ、話をすることでした。

彼女は生まれて初めての電車に乗って『三鷹の森ジブリ美術館』へ行き、ジブリ映画の世界を満喫しました。次に『皇居』を見学し、天皇家の歴史に触れました。池袋では『ポケモンセンター』に行き、game や shopping を楽しみました。夜は焼き鳥を食べ、日本酒を飲みました。翌日、川越市在住の松山女子高校後援会の高田会長に『川越氷川神社』や『時の鐘』等をご案内いただき、彼女は着物を着て日本（埼玉）の伝統文化に触れ、日本料理を堪能し、長年の夢を叶えることが出来ました。皆様のご協力、ご尽力に感謝いたします。



ホストファミリーとなって

久喜中学校2年

広住優羽

私は、中学生向けのローズバーグ市へのホームステイ事業に参加が叶わなかったため、ホストファミリーとして受け入れました。バーバラとパトリースに初めて会った時は緊張しましたが、一週間ほど生活を共にし、交流できてよかったです。彼女たちはショッピングが好きで、川越やモラージュ菖蒲、浅草など日本らしい場所に一緒に行きました。バーバラは友達へのお土産を、パトリースはウイスキー用のコップを探して買っていました。また、甘い食べ物を食べて楽しんでいました。無印良品やセブンイレブンの商品に英語表記があり、日本語表記よりも興味を持ちやすかったようです。着物のレンタルの際に父が翻訳機を使ったため誤解が生じましたが、彼女たちが好みや意思をはっきり示してくれたので、とても助かりました。対面で交流できる良い機会なのに翻訳機に頼ることが多かったのも、これからも英語を学び、自信を持ってコミュニケーションできるようになりたいです。



訪問5日目から7日目

高山・松本方面バス旅行

日本で行ってみたい場所、やってみたい事など久喜市・ローズバーグ市両協会間で何度も意見交換を行い、上高地・高山・五箇山・松本を巡る旅と決定。皆様 どの見学場所にも大満足のご様子でした。



雨の上高地散策



高山の朝市見学



五箇山・こきりこの鑑賞



階段に悪戦苦闘の松本城

訪問8日目と最終日

羽生の「武州中島紺屋」で藍染体験。皆さんが持参された白のTシャツが藍色に染め上がりました。「藍」の甕から取り出した褐色がかった緑色が、だんだんと藍色に変わっていく様子が驚いたり、喜んだり。その後行田の田んぼアートを見学し、お別れ会の会場へ向かいました。最終日は一番の秋ばれの日となり、見送りの方々と名残を惜しんでハグ、ハグ。羽田に向かいました。



「私にとっての通訳ボランティア」

深水瑞希

活動を支えるボランティアの方から

会社休んで通訳に行くの？結婚したころ妻に言われた言葉だ。独身時代に通訳ボランティアを始めて、15年以上が経った。英語の通訳だが、行き先は非常に日本的だ。茶道や伝統芸能の見学など自分ではできない体験をさせてもらっている。下調べはいつも直前だが、楽しい作業だ。（中略）「あの説明、よくわかった」と声をかけてもらったときは、望外の喜びだ。このボランティアには人助けというより、自分も楽しむために参加している。回を重ねるごとに知り合いが増え、2年に一度、旧友に会いに行くかのようだ。アメリカ人と日本人と私と、通訳しながら3人でしゃべっている感覚になる。これは仕事としての通訳では味わえない醍醐味だろう。次回もまた、有給休暇をとり、手弁当で参加することになりそうだ。



中学生国際親善交流 7月22日～8月1日 11日間

かけがえのない宝物

訪問団団長

栗橋西中学校校長 山納智子

令和6年度の派遣は、コロナが明けて久しぶりの交流となりました。私達にとって、ローズバークでの11日間は、本当にかけがえのない宝物となりました。ローズバークの方々は、いつも笑顔で接してくださいました。私達は、国境を超えて人の優しさや温かさに触れることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

最初の出会いは、「Welcome Party」でした。ホストファミリーのみなさんが、温かいハグをして迎えてくださいました。（中略）「Farewell Party」では、涙で目を濡らしながらのハグと記念写真、あっという間のひとときでした。このように、私達は、ローズバークの方々と共に、言葉では言い尽くせないほどのたくさんの思い出をつくることができました。

これらの経験はかけがえのないもので、一生忘れることはできません。なぜなら、言語や文化が違って、私達の心は通じ合い「友情」と「理解」を深めることができた、という体験をしたからです。これからも、この友情が永遠に続いていくことを確信しています。そして、ローズバークの人々が、あの美しい自然や森や動物たちと共生し、豊かで幸せな暮らしが続きますよう願っています。

結びに、未来を担う生徒達にメッセージを送ります。この経験を活かして、将来、失敗を恐れず何事にも主体的に取り組んでください。そして、多様な価値観をもった世界中の人々と積極的に関わりながら、自らの能力を最大限に発揮



経験と思い出

太東中学校3年

内田宥子

私はこの約2週間で、たくさんの経験と思い出を作ることが出来ました。私を泊めてくれたカイリーの家族は、とても優しく、私を楽しませようと、たくさんのことを計画してくれていました。初日は、お互いに緊張してうまく話すことができませんでしたが、一緒に過ごしていくうちに会話などができるようになりました。最終日には、日本に帰りたくなるほど楽しかったです。

アメリカでは、日本とは違うところがたくさんあり、何をしていても新しい発見がありました。馬に乗ったり、ジェットボートに乗ったり、サファリに行ったりなど、たくさんの新しいことにチャレンジする機会が多く、成長することが出来たと思います。またアメリカに行く機会があれば、行きたいです。



濃くて素敵な思い出

菖蒲中学校1年

前島理沙

私は出発するまで様々なことに対しての不安が募り、心配をしていました。しかし現地へ着くと、簡単な英語やジェスチャーを使ってコミュニケーションをとれました。はじめは戸惑っていましたが、段々とホストファミリーと自然体で過ごせるようになりました。きっとホストファミリーが沢山気遣いをしてくれて、楽しませてくれたからだと思います。慣れてきた頃にはもう出国で、もっとローズバークにいたいと思いました。そんな思いがあっただけで、ホストファミリーのことが恋しくなる逆ホームシックになりました。帰国したら、家族や友達に何から話せばいいのかわからなくなるほどの思い出ができました。私は今でも余韻に浸っています。来年の受け入れがとても楽しみです！



◆◆◆ お知らせ ◆◆◆

2025年度の交流の日程が決まりました
詳しくは市ホームページ等でご確認下さい
中学生（受入） 7月15日～25日
一般（派遣） 10月2日～10日

◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

2024年度の一般の方の交流（受入）・中学生の交流（訪問）の一端を紹介させていただきました。この広報をお読みになりましたご感想やご意見をお寄せいただければ幸いです。

編集責任者 山田銀子・鈴木一美・今村暢子